《原　著》

^{123}I-IMP SPECT による光刺激前後の正常および痴呆を伴った高齢者の脳血流

――痴呆の重症度別脳血流 SPECT，視覚誘発電位に対する検討――

小川　公啓*,**　勝沼　英宇**　石田　均***　高崎　優*

*東京医科大学老年科
**立川メディカルセンター悠遊健康村病院内科
***同　立川綜合病院放射線科

要旨　痴呆性疾患における光刺激脳血流 SPECT の有用性について検討した．対象はアルツハイマー型痴呆 8 例，脳血管性痴呆 9 例，正常高齢者 7 例で，Clinical Dementia Rating (CDR) に基づき痴呆の重症度別に 3 群 (I 群；CDR 0, II 群；CDR 0.5〜1, III 群；CDR 2〜3) に分け検討を行った．脳血流は安静閉眼時，光刺激時共に ^{123}I-IMP SPECT (ARG 法) を用いて定量した．また，同時期に視覚誘発電位 (VEP) も測定した．SPECT, VEP 共に光刺激には light emitting diode (LED) ゴーグルを用いた．VEP の P2 潜時は痴呆の重症度に伴い遅延していた．安静閉眼時脳血流は I 群に比し，II, III 群では有意に低下していた．しかし，II 群， III 群間に差を認めなかった．光刺激を行うと，I, II 群では有意に脳血流は増加したが， III 群では明らかな血流の変化は認めなかった．光刺激脳血流 SPECT を用いることにより，脳細胞機能をより詳細に判定できる可能性が示唆された．

(核医学 **36**: 705–713, 1999)